

研究会に参加して

金沢市教育相談センター指導主事

鈴木 久美子

平成11年6月3日に行われた教育研究発表会に、はじめて参加しました。広いプレイルームで、構成遊具を使ってのびのびと遊ぶ子どもたち、いろいろな材料を使って製作している子どもたち、人形を作って劇をしている子どもたち、運動場でリレー遊びをしている子どもたち、どの子も生き生きと活動していました。そして、終了の時間になると、友だちと協力して後かたづけをしていました。その間、先生たちは子どもたちとともに遊びに加わったり、一人でいる子に話しかけたり、困っている子の相談を受けたりしています。先生が大きな声を出す場面は一度もありませんでした。この子どもたちの創造性と活力、そして、先生たちの関わり方のすべてが私にとっては驚きでした。後半の活動においても、係り活動をしっかりしている姿や、紙芝居を食い入るように見つめる姿、友だちの話を一生懸命に聞いている姿が多く見られました。私がそれまでに抱いていた幼稚園のイメージは、まだ未熟な存在である子どもたちを先生が指導している、または、子どもたちが好き勝手に遊んでいるというものだったのですが、そこで子どもたちと先生の姿は全く違っていました。子どもたちは一人ひとり自分の世界を持ち、自己主張しながら、他と関わって生活している、そして、先生たちは一人ひとりの子どもたちの思いを十分に達成させていくための支援をしながら、集団との関わりを大切にしているのだということを知りました。そして、幼稚園は学校と同じく教育の場であるということ強く感じました。

その後、事例研究会に参加させていただく機会を得ることができました。事例研究会では、各クラスで起きたトラブルをもとに話し合いがもたれました。そこではおもに、当事者の子どもの表れをどのように捉えるのか、また、集団との関わりをどう作るのか、そして教師の関わり方などが話されました。一つの事例をもとに、その子どもが抱えている内面の問題や、周りとの関係を詳しく考えていくのです。

私が特に印象に残ったのが、トラブルを当事者だけの問題とするのではなく、そのことに周りの子どもを関与させていくという先生方の姿勢です。諸岡先生が研究会の中で「一人の子を育てるときに、周りの子の援助が必要です。」と言われたことと重なります。そして、一人の子が育つことにより、その集団も育ち、さらに集団が育つことによって一人ひとりもまた育っていくことになるのだと思いました。

小学校においても多くのトラブルが起こります。そして、子どもたち同士で解決したり、ときには教師が関わって解決します。これまで、私が関わるときには、トラブルの解決を目的にした関わりをしてきたように思います。例えば、掃除の時間にふざけあっていたAさんとBさんが喧嘩になってしまったとすると、その喧嘩の原因を聞き、AさんとBさんにどちらが悪いかを判断させ、悪かった方が謝り、それで解決するということです。ときには、状況を確認

るために周りにいた子どもたちに話を聞くこともあります。また、事実を確認した後に、そのことをどう考えるかを周りの子どもたちも一緒に考えることもあります。それらは、当事者であるAさんとBさんがトラブルを解決していくためのものでした。

しかし、掃除の時間に喧嘩が始まると、その間掃除は中断するか、もしくは他の子どもたちがすることになります。そうするとAさんとBさんの喧嘩は当事者だけの問題ではなく周りの子どもたちみんなの問題でもあるのです。ふざけているときに、そのことを止めるための声かけをしなかった周りの子どもにも問題はあるのです。このようなときには、当事者だけの問題にしないで、それを取り巻く子どもたちの関わり方を問題として取り上げ、周りにいた子どもたちがどのような関わりかたをすべきであったかを考える必要があるのです。そして、AさんとBさんだけではなく、周りの子どもたちもお互いに自分の思いを言えるような関係を作っていくことが大切であるということに気づきました。

このように、事例研究会でいろいろな意見を聞く中で、自分がこれまで気づけなかったことに気づくことができました。このほかにも、子どもたちの関係を対等にすることの大切さや、違う価値観を持つ子どもを向かい合わせることによってそれぞれが自分を見直すことができることや、子どもの育ちと、周りとの関係を見ていく必要性など多くのことを学ぶことができました。

そして、何よりも先生方が子どもたち一人ひとりにかけるまなざしの温かさを強く感じ、これが子どもと関わる教師の原点であると改めて思いました。

附属幼稚園の研究会で学んだことを、これからの実践の中でぜひ生かしていきたいと思えます。

